番号11

道総研

美味しいカキを、早くに美味しく食べてほしい！

秋の出荷開始時期を早めるマガキ養殖技術の開発

釧路水産試験場　調査研究部　近田　靖子
（共同研究機関：水産研究・教育機構、厚岸町カキ種苗センター）

概　要

厚岸町で生産されている地場産人工種苗マガキを用いて、産卵後の出荷時期を早期化する技術を開発しました。この技術により他産地に先駆けて高品質なカキの出荷が可能となり、地域のブランド力を高め産地競争力が強化されます。

目　的

マガキの道内主産地である厚岸町では、環境が異なる厚岸湖と厚岸湾を活用して、地場産の人工種苗からシングルシード方式で生産される「カキえもん」が養殖されています。しかし、近年の温暖化傾向により産卵期が長期化し、秋の出荷開始時期に遅れが生じています。そのため本研究では、産卵後の身入り回復を早め、早期に出荷できる養殖技術の開発に取り組みました。

成　果

- 春～夏の成熟期に、暖かい厚岸湖にて網袋で餌量を制限して育成し（写真1）、産卵誘発後、冷たい厚岸湾で身入り回復することにより、1ヶ月程度出荷を早める技術を開発しました（図1）。
- 網袋により餌量を制限すると、肥満度は低下しました。これにより作られる卵の量は低減し、早期に産卵を終了させることができました（写真2）。網袋内での産卵はへい死リスクがあるため、水温をリアルタイムでモニタリングし、自然産卵する前に産卵誘発を行いました。
- 網袋による餌量制限の時期が早いほど産卵後の再成熟率は低くなりました。また、産卵後に低水温海域の厚岸湾に垂下すると、再成熟せずに身入り回復へむかうことがわかりました。

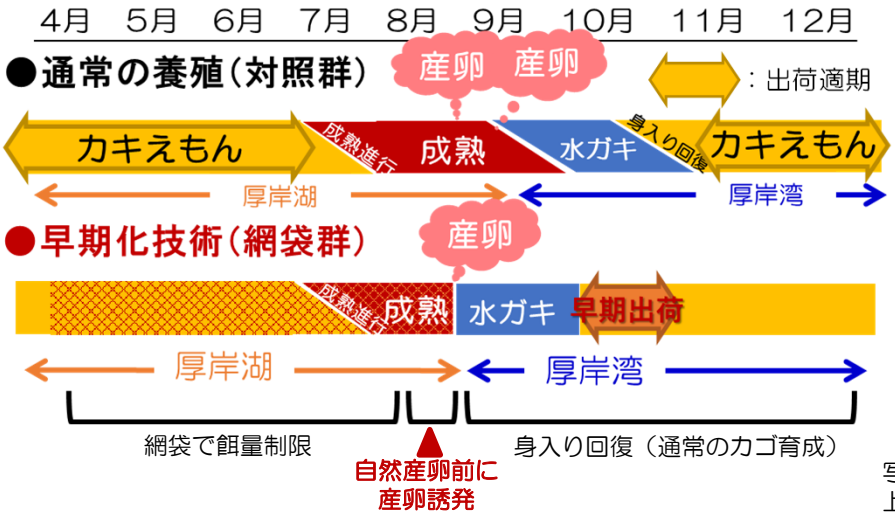

図1　早期出荷を可能とするマガキ身入り回復早期化技術

写真1　網袋でカキの餌量を制限

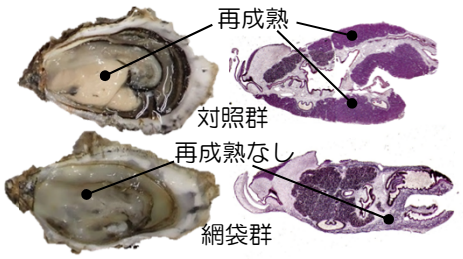

写真2　産卵後再垂下20日目
上段：対照群→再成熟
下段：網袋群→再成熟なし（身入り回復途中）

活　用

- 本技術により、他産地に先駆けて高品質なカキの出荷が可能となり、地域のブランド力を高め産地競争力が強化されます。研究成果を厚岸漁協カキえもん養殖協議会の勉強会にて紹介しました。
- R3年度職員奨励事業「マガキ身入り回復早期化技術の普及とマーケット調査」で、さらなる普及とシェフや消費者からアンケート収集を行い、結果を漁業者へフィードバックします。

（公募型研究；イノベーション創出強化研究推進事業　平成30～令和2年度　委託元：生研支援センター　）

問い合わせ　釧路水産試験場　調査研究部　TEL：0154-23-6222